

令和 2 年 9 月 17 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02165

研究課題名(和文) 蝋管蓄音機の歴史的背景に関する総合的研究 明治期の新聞メディアを通じて

研究課題名(英文) Project on Japanese Wax Cylinders by Research on Newspapers of the Meiji Period

研究代表者

松村 智郁子 (MATSUMURA, Chikako)

東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号：60436699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治期の地方紙から「錫箔蓄音機、蝋管、蝋管蓄音機、平円盤(レコード)、平円盤蓄音機」をキーワードとする記事や広告に対して網羅的な調査を行い、地方における蓄音機類の受容から衰退に至る状況、社会的動向や変遷を明らかにした。これらの研究成果は、最終年度に刊行した報告書にまとめ、報告書の資料篇には、地方紙に掲載の「挿絵」から精査した芸能や音楽のシーンを俯瞰するための図絵集(約100種類、約1200点)も加えた。この図絵集に描かれた内容は、当時の人々が蝋管に録音して聴いていた可能性をもつ。報告者は、そこから「明治期の人々はどのような音楽を聴いていたのか」という本研究の問いに対する結論を導いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、「明治期の人々が蝋管(ろうかん)をどのように使用していたのか」ということに主眼を置き、明治期の地方紙の網羅的な調査を行った。そして、「地方における受容から衰退に至る状況」および「社会的動向や変遷などの具体例」を読み取り、過去に行った都市部の新聞調査の情報も併せて集結した。一方、地方紙に掲載された挿絵や上演記録などから「明治期の人々はどのような音楽を聴いていたのか」という当時の芸能・音楽(明治期の音楽事情)についても調査を進めた。そして、これらの調査から得た成果を『蝋管蓄音機の歴史的背景に関する総合的研究 明治期の新聞メディアを通じて』(最終年度に刊行)と題する報告書にまとめた。

研究成果の概要(英文)：The phonograph(wax cylinder)which Edison invented in 1888, were popular in Japan in the Meiji period. In the newspapers of the time, there are many articles and advertisements on the phonograph. Reading newspapers, we can know about the examples of phonograph usage. The preview of the first phonograph was held in 1889. The people were quite surprised to hear a recorded voice. On the street, there was merchant who played phonograph, and it was used in theaters and events. The people listened to the recorded folk songs and voice of Kabuki actors. Later, phonograph was used for entertainment, and study of languages. In the days of Russo-Japanese War (1904), it was used to recording of wills, encouragement of the soldiers, etc.. A disk record was released in 1903. Sound quality is good, and demand increased. On the other hand, the demand of the wax cylinder decreased. Because Japan passed through Great Kanto Earthquake(1923)and World War II (1941-5), most of the wax cylinders no longer exist in Japan.

研究分野：音楽学

キーワード：蝋管 蓄音機 明治期 新聞メディア 記事 広告 芸能 音楽

1. 研究開始当初の背景

本研究の主題となる「蠟管（ろうかん）」¹に関連する研究は、東京藝術大学大学美術館で保管する蠟管の保存体制を整える事業を発端とする。2005年に事前準備が始まり、2006年から本格的なプロジェクトを始動、関連する研究は通算15年目を迎える。報告者が関係する事業の大まかな経緯は次の通りである。

- (1) 2005年9月：蠟管に関連する基礎調査開始。
- (2) 2006年4月～2009年3月：「明治期における音楽録音資料・蠟管の保存体制と公開手法の研究」² H18-20年度 基盤研究(B)一般 研究代表者:竹内順一(～2008.3)、薩摩雅登(2008.4～)
- (3) 2011年4月～2014年3月：「明治期における蠟管蓄音機の受容と普及の研究—音楽、声の記録と社会的背景を中心に—」³ H23-26年度 基盤研究(C)一般 研究代表者:松村智郁子
- (4) 2015年4月～2020年3月：「蠟管蓄音機の歴史的背景に関する総合的研究—明治期の新聞メディアを通じて—」⁴ H27-R1年度 基盤研究(C)一般 研究代表者:松村智郁子
- (5) 2017年6月～2018年3月：東京藝術大学COI拠点「蠟管プロジェクト」⁵ 研究リーダー:宮廻正明

本研究は、これらの研究をさらに発展させた内容を目指し「錫箔蓄音機、蠟管、蠟管蓄音機、平円盤⁶（レコード）、平円盤蓄音機」をキーワードとする明治期の新聞メディアから、記事や広告の網羅的な調査、熟覧を行った。本研究において地方紙を調査の対象とした理由は、以前に調査を重ねた「都市部における状況」と「地方における状況」を比較することにより、新たな結果が導き出せるのではないかと考えたことによる。

2. 研究の目的

本研究は明治期の地方紙から蠟管、平円盤レコード、蓄音機などに関する記事や広告の網羅的な調査を行い、次の3点を明らかにすることを目的とした。(1)地方における受容から衰退に至る状況、社会的動向や変遷を明らかにする。(2)本研究の地方紙調査と過去の都市部の新聞調査を併せ、明治期の国内新聞の網羅的調査を総括する。(3)調査の主眼である蠟管蓄音機類に加え、同時期の芸能・音楽をはじめ、紙腔琴などの音楽装置の調査も行い、新聞記事における明治期の音楽事情を集大成する。これらの目標のもと、研究期間内に蓄音機関連および同時代の芸能や音楽の情報収集を進めた。そして、「蠟管がどのように使用されていたのか」「明治期の人々はどのような音楽を聴いていたのか」という本研究の問いを追求した。

3. 研究の方法

本研究の新聞調査では、国立国会図書館所蔵のマイクロフィルムを網羅的に読み、該当記事をデータベース化し、情報（新聞名、日付、見出し、内容、挿絵の有無など）を蓄積した。調査年代は、日本で初めて蓄音機が紹介された明治12年(1879)～明治45年(1912)としたが、地方紙の場合、明治20年代後半や30年代の創刊、明治半ばで終刊を迎えるものもあり、次の16社の新聞を対象とした。

北海道毎日新聞、北海タイムス、岩手日日新聞（岩手日報、岩手公報）、秋田日日新聞、福島民報、河北新報、東北新聞、上毛新聞、下野新聞、北國新聞、福井新聞、山梨日日新聞、扶桑新聞、伊勢新聞、徳島日日新聞、福岡日日新聞。

これらの新聞から、蓄音機関連および芸能や音楽関連（公演、劇評、随筆、論考、挿絵、刊行物など）の記事や広告を調べ調査先で複写し、その紙面をスキャナーで読み込み画像データとした。

この調査から、蓄音機関連の掲載797件、芸能・音楽関連1万5千件以上の情報を得ることができた。そしてこれらに対して熟覧調査および分析を行った。また、各情報の追跡調査のため、当時のレコードなどの音楽資料類や各地の郷土資料についても調査を重ねて本調査を裏付けるための情報とした。

¹ 明治21年(1888)にトーマス・A・エジソンが錫箔蓄音機を改良発明した録音再生機。蠟管(英語名: wax cylinder)とよばれる蠟製の媒体を用いる。日本には明治22年(1889)に鹿鳴館で試演会が開かれ、その後、都市部において爆発的な人気を得た。

² 本学所蔵の212本の蠟管の保存状況を見直し、洗浄、燻蒸を実施、蠟管の保存環境を整えた。そして、収録内容の状態を確認するため、針接触方式のデジタル再録音機Archeophone(アーキフォン)の開発者兼録音技師であるHenri Chamoux(オンリ・シャム)氏をパリから招聘し、蠟管音源の抽出・デジタルデータ化(WAV形式)を依頼した。成果をまとめた報告書『明治期における音楽録音資料・蠟管の保存体制と公開手法の研究』(2009)を発行した。

³ 明治期に発行した都市部の新聞(読売新聞、東京朝日新聞、郵便報知新聞、萬新報、時事新報、都新聞、大阪朝日新聞、大阪毎日新聞、日出新聞、神戸新聞、神戸又新日報など30社)を網羅的に調査し、その成果は『明治期における蠟管蓄音機の受容と普及の研究—音楽、声の記録と社会的背景を中心に—』(2015)にまとめた。

⁴ 本研究である。報告書『蠟管蓄音機の歴史的背景に関する総合的研究—明治期の新聞メディアを通じて—』(2020)に明治期の地方紙を調査した成果をまとめた。

⁵ 2008年に本学大学美術館において抽出した音源データを用いて蠟管に対する新たな活用方法の提案を目指した。成果は「蠟管プロジェクト—蠟管の新たな活用方法を目指して—」『bulletin vol.3(平成28・29年度紀要)』(2019)にまとめた。

⁶ 丸くて平たい形状のため名付けられたと考える。紙面には「平円盤音譜」や「音譜」などと記されている。明治40年代には「平円盤レコード」や「レコード」ともよばれた。昭和に入り「LPレコード」の発売後には、区別するために「SPレコード」とよばれるようになる。本稿では明治期の表記を用いて「平円盤」と記した。

4. 研究成果

本研究における明治期の16社の地方紙調査では、「錫箔蓄音機」に関する掲載は皆無であったが、次の内容を確認することができた。主な内容を項目別に分類し、掲載年代順に列記する。

(1) 蓄音機に関連する「記事」

①米国の蓄音機使用事例〈17件〉

この分類の初掲載は、エジソンの発明による「電話写言器（フォノグラフ）」の使用方法を記した記事である〔「通信写音器」明治21年1月25日付『北海道毎日新聞』〕。他にも発明者エジソンのこと、シカゴ万博やパリ万博への出品のこと、蓄音機の使用例（結婚式、ハガキ、語学学習ほか）などを記事としている。これらの中には、都市部発行の新聞と同内容の掲載もあり、地方紙に記事を転載していたとも考えられよう。

②蓄音機の試演〈16件〉

蝸管蓄音機が日本で紹介された翌年の明治23年(1890)～24年(1891)にかけて、蓄音機技術者の松村光吉や土屋一は「蓄音機の試演会」を開催している。これは、蓄音機の用途を紹介して周知させることを目的とし、予め収録した歌舞伎俳優の声や、その場で蝸管に録音した音声を再生して参加者に聴かせる実演会であった。観客は老若男女を問わず、各地域の公民館や学校などの公共施設にて開催された。当時の様子を記した記事を合わせると、静岡、甲府、長野、名古屋、岩手、仙台など各市内やその近郊にて試演会が実施されていたことがわかった。

③蓄音機に関する所感〈16件〉

①製造：最も古い記事は、時計師の中條勇次郎が東京で米国人技師による「蓄音機の試演会」に参加の後、試作品の製造に取り組んだことを記している〔「撮音機の製造」明治24年1月30日付『扶桑新聞』〕。そして後に自作の機械による試演会の開催も試みている〔「撮音器」明治24年3月29日付『扶桑新聞』〕。

平円盤が主流となる明治後期には「以前の蝸管蓄音機からは雑音混じりの音楽が聞こえ、音楽を乱していた」と蝸管に対する追想もみられる〔「噪音なき新式蓄音機」明治44年6月11日付『扶桑新聞』〕。

②用途：日露戦争以降の記事は、蓄音機を病院へ寄贈したこと、負傷兵を癒す目的のために病院をはじめ様々な場所で蓄音機を用いたことを中心に記している。そのほかには、蓄音機の夜間使用に対する苦情〔明治38年6月2日付『北國新聞』〕、蓄音機を用いた浪曲の稽古への反論〔明治45年4月13日付『扶桑新聞』〕、蓄音機の真似芸（声帯模写）〔明治44年11月29日付『北國新聞』〕など、蓄音機の用途に関する多種多彩の記事が掲載された。

④公演の告知〈20件〉

最も古い告知は「フランス機械人形」〔明治23年4月23日付『扶桑新聞』〕である。人形の体内に仕込まれた「蝸管」には、フランス語による自己紹介が録音され、言葉を発する人形としてその存在は話題性を集めたという。現存する実物も確認ができています〔図1〕。また、明治35年(1902)までの公演には蝸管の録音を聞かせるものが明治37年(1904)以降は、平円盤が蝸管に代わり邦楽や洋楽奏者と共に演目の一つとして舞台上がる例がみられた。

⑤公演の報告〈21件〉

蓄音機を用いた公演の報告は「写真幻灯蓄電器興行」〔明治30年3月2日付『扶桑新聞』〕に始まり、活動写真の興行の余興を主とする。明治36年(1903)の第五回内国勸業博覧会では、明治天皇が博覧会行啓の際に参考館やホーン館の展示品の蓄音機から洋楽曲を聴いたことを記している。同年には、宗教家や篤志家らによる、孤児の保護など救済を目的とした全国的な連絡組織「日本慈善同盟会」が設立される。それに伴い各地で開催された「慈善演芸会」では、「蓄音機」が演芸会の演目の一つとして登場している。

⑥販売の告知〈11件〉

明治39年(1906)以降には、平円盤に関する内容が主となり「平円盤新着荷」という広告を目にする機会が増える。これは、アメリカから販売用の平円盤を乗せた船便の到着を知らせるものである。当時の日本では、平円盤への録音設備が整っていない、日本で録音した音源はアメリカへ渡りそこで商品化されていた。

なお、明治45年(1912)に浪曲が大流行すると、当時人気を集めていた桃中軒雲右衛門の平円盤は、購入を予約制としている告知も見られる〔「雲入道の音譜を予約」明治45年5月21日付『扶桑新聞』〕〔図2〕。

⑦抽選会の景品〈2件〉

「催し物の入場者数」を予想し、予想的中者に景品を贈呈する企画である。景品には、蓄音機、懐中時計や壁掛け時計、絹張蝙蝠傘などの高価な舶来品が用意されている〔「人気者当て」明治43年4月17日付『扶桑新聞』〕。このような蓄音機を景品に用いた同種の企画例は、芸妓の人気投票の順位を予想する企画〔「神戸新聞八周年記念懸賞」明治39年2月8日付『神戸新聞』〕にもみられ、当時人気を博した企画と推測できる。

(2) 公演の告知〈18件〉

最も古い告知は、久松座（名古屋）の公演である〔「蓄音器」明治25年2月13日付『扶桑新聞』〕〔図3〕。明治20年代の公演では蓄音機を単独で使用する例が多くみられるが、明治30年代に入ると蓄音機は活動写真との併用が増える。単独の使用が減る中、御園座（名古屋）では、新演劇の公演の中幕に蝸管蓄音機による「勧進帳」（弁慶：市川團十郎、富樫：市川左團次）が上演されている〔「大声蓄音機」明治36年9月20日付『扶桑新聞』〕。

平円盤の発売後は、特に名古屋で「平円盤による浪曲演奏会（有料）」の開催が増す。浪曲師は劇場に出向かず（出演しない）、観客は客席で蓄音機から流れる平円盤の音楽を聴いていたようだ。明治45年の『扶桑新聞』には、浪曲の告知や広告を連日掲載する時期があり、浪曲ブームの仕掛け人が新聞社であった可能性も考えられよう。

(3) 販売の広告〈約700件〉

本研究の調査では、明治期の地方紙に広告を掲載した蓄音機販売店は86店あり、その広告掲載数は約700件におよぶ。地方紙の広告初掲載は、石原欧米楽器店（大阪）〔明治30年10月1日付『徳島日日新聞』〕〔図4〕。続いて、天賞堂（東京、貴金属類専門店）〔明治30年11月16日付『伊勢新聞』〕である〔図5〕。石原も天賞堂も、都市部の新聞においても同年に広告を初めて掲載している。また、都市部の新聞広告の初掲載店は、横浜のフレザー商会〔明治22年1月9日付『時事新報』〕であり、これは、明治21年(1888)に蝸管蓄音機を日本で初めて披露した翌年のことである。明治32年(1899)まで、蓄音機販売店は、横浜、東京、大阪、広島各都市にあり、宝石や貴金属、自転車、活動写真器、幻燈機械などの輸入品を扱う店舗という共通点を持つことを特徴としている。明治33年(1900)には、日本初の蓄音機専門店三光堂（東京浅草）が開業する。大阪、神戸、小樽など各地に支店を構え「蓄音機といえば三光堂」という程、圧倒的な広告の掲載数であった〔図6〕。

明治36年(1903)、天賞堂から平円盤の発売が始まる。それ以降、地方都市の蓄音機店は年々増加する傾向にあり、各店舗による広告の掲載数も増加している。明治43年(1910)、日本蓄音機商会（日本コロムビア株式会社の前身）が設立し、地方の小売店と提携する〔図7〕。これらの店舗は、日本蓄音機商会の代理店として広告を出す。明治40年代には国内のほぼ各県に平円盤を販売する蓄音機店の開業が確認できる。

(4) 蓄音機をタイトルとする「小説」や「台本」

①小説

『福井新聞』にこの小説が連載される以前、紙面には蓄音機関連の掲載が一度もなく、この小説から「蓄音機」という言葉を知り得た読者もいたことであろう。大筋は、夫を亡くした妻（松子）が生前の夫の声を「蝸管蓄音機」から聞き悲涙、錯乱状態に陥る。録音内容は、日常生活の他愛もない会話であり、夫がまだ傍に居るように思えてならない。妻は夫の絶息を受け入れられず、自ら「蝸管蓄音機」に遺言を吹き込み自殺を覚悟する…という内容である。小説には、主人公の松子がゴム管（イヤホン）〔図8〕を耳に付け、蓄音機から亡き夫の声を聞き、涙に沈む様子が記されている。

蓄音機を発明したエジソンは、秘書に伝言を託すために蓄音機を必要としたという。小説の中ではあるが「言葉を残す」という発明当初の目的に近い使用例がみられる。また、日清戦争や日露戦争の前に、蓄音機店は「遺言を蓄音機に」と宣伝文句にしていたこともあり、先見の明を持つ小説ともいえる。

②仁和賀(仁輪加)芝居の上演台本⁸

仁和賀芝居とは「にわか仕組んだ寸劇」の意で、「仁輪加」「二〇加」などとも記す。現在では「博多俄」と呼ばれることが多い。日常の出来事を博多弁で上演し、郷土演芸として継承されている。演者は厚紙に目と眉を描いた「目かずら」を付け、自身の目を隠して舞台上ることを特徴とする〔図9〕。この台本の大筋は、商売に失敗した借金地獄の男が、知人から蓄音機を使った商売を持ち掛けられるが、高価な機械のため使用が難しい。そのため、その音を真似て金儲けをしようと企む…という内容である。この台本から、高価な蓄音機は手が届かないが、真似ができる程、馴染み深いことが読み取れる。また、蓄音機の音を真似る例は、金沢の芸妓・青梅とたみの二人が新年会の出し物に「蓄音機の真似芸」を演じていたこと〔「同人新年会 奇抜な趣向 無数の余興」明治44年2月1日付『北國新聞』〕にも記されている。芸の詳細は不詳であるが、蓄音機から聞こえるレコードの音楽や歌に加え、機械が発する「雑音」も声で表現していたかもしれない。博多の仁輪加芝居の台本にも「蓄音機の真似」を商売としていた様子の描写があることから、当時、蓄音機の真似（声色・声帯模写芸）が流行していた可能性も考えられる。

まとめ

明治期の新聞というメディアの調査を通して、地方紙には蓄音機関連の掲載が極めて少なく、都市部のような爆発的な人気を持たない印象を抱いた。その理由として、各地域における充実した芸能活動の存在が影響していると考えている。例えば東北地方および北関東や甲信越周辺では、巡業に訪れた東京や大阪の演者による歌舞伎や芝居の興行、娘義太夫や浪花節、薩摩琵琶、講談、落語などの公演に加え、芸者衆の歌舞音曲、地元有志らによる邦楽や洋楽（ヴァイオリン、オルガン、唱歌など）の演奏会も盛んに行われている。また、金沢ではこれらの興行に加え、地元有志が受け継ぐ能楽公演や、加賀萬歳などの地芸能も盛んに行われた。これらの様子を記した紙面の記事（劇評や聞き書きなど）や挿絵は克明な記録であるとともに、当時の文化の隆興も伝えている。多種の芸能興行を行う環境の地において、あえて新聞に蓄音機を取上げるまでもなく、地域差はあるが各地域の芸能が充実している場合、蓄音機の浸透は難しいと結論づけられよう。

7 神田青坊主旧作『蓄音器』明治23年9月13日～10月1日付『福井新聞』全11回

8 『妻は鬼人 蓄音機の失敗』博多 昼屋組 富田文治作、明治32年5月4日～14日付『福岡日日新聞』全8回

一方、1万5千件を超える芸能・音楽関連の記事や広告には、約1300点以上もの挿絵が描かれ、それらは紙面に視覚的な解りやすさを加え、臨場感を高めるものである。また、挿絵は我々にとっても当時の芸能や音楽の様子を容易に理解することができる“記録史料”としての役割を持つと考えている。そして、そこに見られる音楽や声は、蝸管に録音され当時の人々が聴いていた可能性があると考えられるため、本研究の報告書の資料篇にこれらの挿絵 [図10] を、(1)芸能の場面⁹、(2)楽器演奏の場面¹⁰、(3)広告の挿絵¹¹ (芸能・楽器類) の各ジャンルに分類した図絵集「明治期の地方紙に登場する“芸能の場面、楽器の演奏、広告の挿絵”と「『北國新聞』に見る金沢の名士による“隠し芸”」にまとめた。

また、明治期には芸能・音楽に関連する書籍や楽譜類も数多く出版されている。これらを掲載した新刊案内の広告を集約し「明治期の地方紙に見る“新刊案内”—芸能・音楽関連の刊行物」と題する論文も報告書の資料篇に含めた。明治期の地方において、蓄音機は日常に突然飛び込んできた「文明の証」ともいえる音具である。本研究を通して、新聞というメディアの“記録媒体”から、当時の人々の蓄音機の受け入れ方を読み取ることに加え、明治期の充実した芸能のあり方についても窺い知ることができた。



[図1] ①JUJU, BnF(フランス国立図書館)所蔵(2009.2著者撮影) ②「物言ふ人形」明治23年6月7日付『時事新報』〈体内に蝸管を仕込んだ人形〉 [図2] 「昨年の演芸界雲右衛門熱!」明治41年1月1日『北國新聞』 [図3] 「蓄音器」明治25年2月13日付『扶桑新聞』 [図4] 石原商舗広告 明治30年10月1日付『徳島日日新聞』 [図5] 天賞堂広告(部分)明治30年11月16日付『伊勢新聞』 [図6] 三光堂広告 明治35年5月25日付『徳島日日新聞』 [図7] 長谷川時計舗の平円盤新着荷広告 明治44年10月11日『扶桑新聞』 [図8] ①「ゴム管を付けて蓄音機を聴く人々(部分)」高橋桐亭「大道所見 其の五 蓄音機」『風俗画報216号』東陽堂, 1900, p.8より転載 ②「蓄音機のゴム管(複数用)」『PHONOGRAPH PATHÉ』phobogallery復刻より転載 [図9] 「博多仁和加『新聞の丸呑』(4-3)」明治34年4月16日『福岡日日新聞』 [図10] (報告書資料篇より) ①「美人百態(33)女義太夫」明治36年10月17日『徳島日日新聞』 ②「加賀萬歳」明治45年1月1日『北國新聞』 ③「美人百態(86)ヴァイオリン」明治36年12月27日『徳島日日新聞』 ④「琴三味線販売店 岡野勘兵衛」明治41年10月01日『北國新聞』 ⑤「石川商會」明治40年4月18日『福岡日日新聞』〈自転車曲芸〉 ⑥「金沢 森忠酒店」明治37年8月28日『北國新聞』〈楽隊〉 * 報告者による所見を〈 〉内に記した。

9 (1) **芸能** (約35種、478点)：雅楽、能楽、歌舞伎、義太夫、娘義太夫、人形遣い、話芸(講談師、落語家、浪曲師)、新演劇、踊り(座興や余興、舞台外観、盆踊り)、仁輪加、見世物および諸芸など(軽業、曲芸、剣舞、自転車、玉乗り、大力、のぞきからくり、造り物、物売り、辻占)、正月の芸能(萬歳、猿引(猿廻)、獅子舞)、招魂祭・祭礼(盛岡、金沢、徳島、福岡、こどもの遊び(太鼓、まりつき、おはじき、なわとび))。

10 (2) **楽器** (約48種、448点)：**邦楽器**：箏、琵琶(雅楽琵琶、薩摩琵琶など)、三味線、胡弓、笛の類(尺八、横笛、ほら貝、よび笛、あんま笛)、太鼓の類(革製：締太鼓、鉦打太鼓、金属製：釣鐘、半鐘、鉦、伏鉦、鈴、驛鈴、馬鈴(駅路)、風鈴、ベル、手平鉦、木製魚板、打板、木魚、拍子木、砧、鳴子、ささら)、合奏、楽器図、暴力的な場面。**明清楽器ほか**：(月琴、清国や朝鮮の楽器)。**洋楽器**：風琴(オルガン)、ピアノ、ヴァイオリン、手風琴(アコーディオン)、喇叭、唱歌、楽譜、楽隊、鐘、その他(鈴、ベル、あんま笛、鳴子、砧)。

11 (3) **広告** (約44種、270点)：**芸能**：能楽、歌舞伎(勧進帳、助六由縁江戸櫻、暫、伽羅先代萩、その他)、義太夫、踊り、太神楽、幻燈、曲芸。**邦楽器**：尺八、横笛、絃楽器(箏、三味線、琵琶)、小鼓、太鼓の類、拍子木、鐘、その他(鈴、ベル、あんま笛、鳴子、砧)。**洋楽器類**：演奏、楽隊、ダンス。**楽器店**：邦楽器、風琴(オルガン)、ピアノ、手風琴(アコーディオン)、ヴァイオリン、多種、楽隊、吹風琴、紙腔琴、その他(ハーモニカ、銀笛、陽琴、鉄心琴、クラリネット、鈴琴)、蓄音機。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 松村智郁子	4. 巻 平成30年度
2. 論文標題 明治期の日本人とヴァイオリン(1) 松永定次郎（洋楽器製造者）に関する一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京藝術大学大学美術館年報・紀要<平成30年度 >	6. 最初と最後の頁 42, 45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松村智郁子	4. 巻 平成29年度
2. 論文標題 明治期のカラオケ・紙腔琴(7) 内国勸業博覧会の出品 2	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京藝術大学大学美術館年報・紀要<平成29年度 >	6. 最初と最後の頁 46, 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松村智郁子	4. 巻 3
2. 論文標題 「蠟管プロジェクト」- 蠟管の新たな活用方法を目指して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 bulletin vol.3(平成28・29年度紀要)	6. 最初と最後の頁 42, 50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松村智郁子	4. 巻 なし
2. 論文標題 明治期の和洋合奏 日本人とヴァイオリン	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 心地の良いノイズ「茶道」 薄茶点前の音を聴く	6. 最初と最後の頁 6, 7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松村智郁子	4. 巻 平成28年度
2. 論文標題 明治期のカラオケ・紙腔琴(6) 内国勸業博覧会の出品 1	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京藝術大学大学美術館年報・紀要<平成28年度>	6. 最初と最後の頁 36, 40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松村智郁子	4. 巻 平成27年度
2. 論文標題 明治期のカラオケ・紙腔琴(5) 販売元・銀座十字屋 2	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京藝術大学大学美術館年報・紀要<平成27年度>	6. 最初と最後の頁 42, 46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松村智郁子	4. 巻 平成26年度
2. 論文標題 明治期のカラオケ・紙腔琴(4) 販売元・銀座十字屋 1	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 東京藝術大学大学美術館年報<平成26年度>	6. 最初と最後の頁 42, 46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 松村智郁子
2. 発表標題 明治期の「ものいふ器械」 蝸管蓄音機と紙腔琴
3. 学会等名 東洋音楽学会第68回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松村智郁子
2. 発表標題 すぐわかる！ 蠟管蓄音機 明治期の日本国内略史
3. 学会等名 東京藝術大学COI拠点主催報告会 蠟管の中のノイズ（三味線と三線の音楽） 人間の持つ能力と感受性への挑戦
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松村智郁子
2. 発表標題 東京音楽学校邦楽調査掛が録音した明治の音楽 蠟管蓄音機を用いて
3. 学会等名 東京藝術大学COI拠点主催報告会 蠟管の中のノイズ（三味線と三線の音楽） 人間の持つ能力と感受性への挑戦
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松村智郁子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 発行者: 松村智郁子(東京藝術大学音楽学部)	5. 総ページ数 231
3. 書名 蠟管蓄音機の歴史的背景に関する総合的研究 明治期の新聞メディアを通じて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----